



▲フィナーレでは入所者とボランティアが手を取り合って拍手にこたえた。「人件費を考えるとボランティア抜きではとても実現しなかった」と岩城社長  
▶仮装行列では、足腰の弱った出演者が倒れないように4人のボランティアが後ろから支えていた  
▼合奏は、1年半前から練習した。「失敗なしにできました」と安井美代子さん（82=手前）



●撮影 吉川 努 ●文 伊東謙治

「赤城の山も今宵限り……」。国定忠治に扮した94歳の男性が威勢良く切ったタンカに大きな拍手がわいた。続く台詞を忘れて、背中を支えるボランティアに「おじいちゃん、台詞、台詞」とせがまれたのはご愛嬌だ。

「平均年齢85歳の学芸会」と銘打った催しが10日、東京・練馬区で行われた。区内の老人ホーム「シルバーヴィラ向山」が開いたもので、入所者40人が合奏や仮装行列などを披露した。

「お年寄りだってスポットライトを浴びたいと思ってるんです。年寄りはおとなしく寝ている、という風潮に『石投じたい』と、同ホームの岩城祐子社長は話す。

しかし、皆さん希なるご高齢者。「やる気」はあるが、足腰が弱り、頭の回転も思うようにならないだけに裏方は大変。当日は、通常の介護態勢の倍近い約100人の職員、ボランティアが集まり、午前7時過ぎから、着付け、化粧、会場への搬送に、駆け回った。舞台上でも、よろける出演者を後ろから支えたり、体調の変化や徘徊に目を光らせたり……。閉会後は「みんな、グツタリしていた」（岩城社



▶会場と施設までは歩いて10分くらいの距離だが、入所者は歩行が困難な人がほとんどなので約1時間30分かけてバスでヒストン輸送した

長」という。

そんな苦勞の甲斐あって学芸会はなかなかの盛況。歩行補助具なしでは歩けなかった人が閉会后に独力で歩き始めたり、ひねくれがちだった人が、発表という目標が出来たからか、素直な性格に戻ったり、と思わぬ効果もあったという。

「入所者がすっかり元気になって『またやりたい』次は私も出る』って言い出しちゃって。私は、少し休みたい、と思ったんだけど」と岩城社長は笑った。